

「大学生の交通環境学習 (MM 教育) に対する関心」

常磐大学人間科学部 助教 大高 皇

私が茨城県水戸市内の私立大学で社会科の教員養成に携わり始めてから、9ヶ月が経過しました。ここ水戸市も、中心市街地でのフードデザート問題や、地元のバス事業者の経営破綻など、交通に関する問題を抱えており、モビリティ・マネジメント (MM) の必要性を肌で感じています。そこで、教員養成課程の中で、交通環境学習を担うことができる教員を育てられないかと、日々試行錯誤をしています。

この試みをはじめて気が付いたのは、きっかけさえ与えれば、大学生は MM や交通環境学習に強い関心を持つ、ということです。例えば、私の担当科目の一つ、人文地理学 II では、交通地理学の見方・考え方を学生に習得させた後、水戸市内でフィールドワークを行い、上述の問題を体感させました。そして、「水戸市で MM を行うには、どんな施策が有効だろうか」を考えさせました。

すると大学生は、次々に色々なアイデアを出してきます。「カーシェアリングを普及させてはどうか。」「山手線の電車みたいにバスの車内に液晶モニタを設置して広告を流せば。」「小学生にバスの乗り方を教えよう。」これらの提案に対し、具体的事例を紹介するのが私の役割です。「カーシェアリングを導入している大学があるよ。」「『かな ch.』というデジタルサイネージを調べてごらん。」「バス教室の事例を集めてみたら。」このように私がキーワードを提示するだけで、大学生はそれぞれの具体例を調べ、発表し、互いに有効性を評価することができました。

交通は生活に身近なものです。従って、きっかけさえ与えれば、誰でも交通について切実性をもって考えることができます。この点が、交通環境学習の魅力だと思います。